ー牧師室からー

コリントの町にはギリシャの神々とその神殿があった。人々は膨大な動物の肉を捧げ信仰を現していた。捧げられた肉はまず神殿に仕える祭司が食べ、一部は礼拝者に返され神殿の境内で宴会のようにして食べた。この宴会は、悪霊が食物から体内に入ると考えられていたから、神殿で清められた肉として宗教的な意味合いもあった。なお残った肉は神殿の焼き印が付いたまま町の肉屋におろされていた。

コリント教会では、この偶像に捧げられた肉を食べて良いかどうかが問題なった。偶像には何の意味も力もないから食べて一向に構わないという自由派の人々がいた。一方、偶像礼拝から百八十度改宗してクリスチャンになったが、まだ信仰が幼く偶像に捧げた肉を食べることに迷う人々がいた。この問題に質問を受けたパウロは生ける神はお一人であるから偶像に捧げた肉を食べても構わないと自由派の信仰の正当性を認めた。しかし、その次に信仰が幼く迷う人のためにもイエス・キリストは十字架で死なれたのであるから、その「兄弟をつまづかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません」と語っている。「わたしにはすべてのことが許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない」。この言葉がパウロの倫理の基準である。

神を信じることは地上の物を全てあるがままの物として相対化する。この信仰が何物にもとらわれない解放をもたらす。パウロはがんじがらめにされていた律法からイエス・キリストの十字架によって解放され、全てが許されていると福音の自由を喜んだ。しかしパウロはその自由を幼く弱い人を支えるため自分を捨てる自由としてとらえた。この捨てる自由は十字架でご自身を捨てられたイエス・キリストの十字架に倣っている。

自由を弄ぶ強い人の高慢によって悲劇が生み出されている。強い人の自由がパウロのように弱い人のために用いられたら世界は変わるであろう。

週　報

1994年8月28日　聖霊降臨節第15主日

巻15　　22号

1994年度教会主題

「十字架のキリストを証する」

聖　句　あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。
だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。
コリントの信徒への手紙一　6章20節

目　標　1．生活を整えて礼拝、諸集会を守る。
2．一人一人が伝道と奉仕を。

日本キリスト教団　横浜港南台教会

〒233 横浜市港南区港南台 7丁目-8-29

電　　話　045-833-5323

ファックス　045-833-6616

振　　替　00290-4-13994

牧師　秋吉隆雄